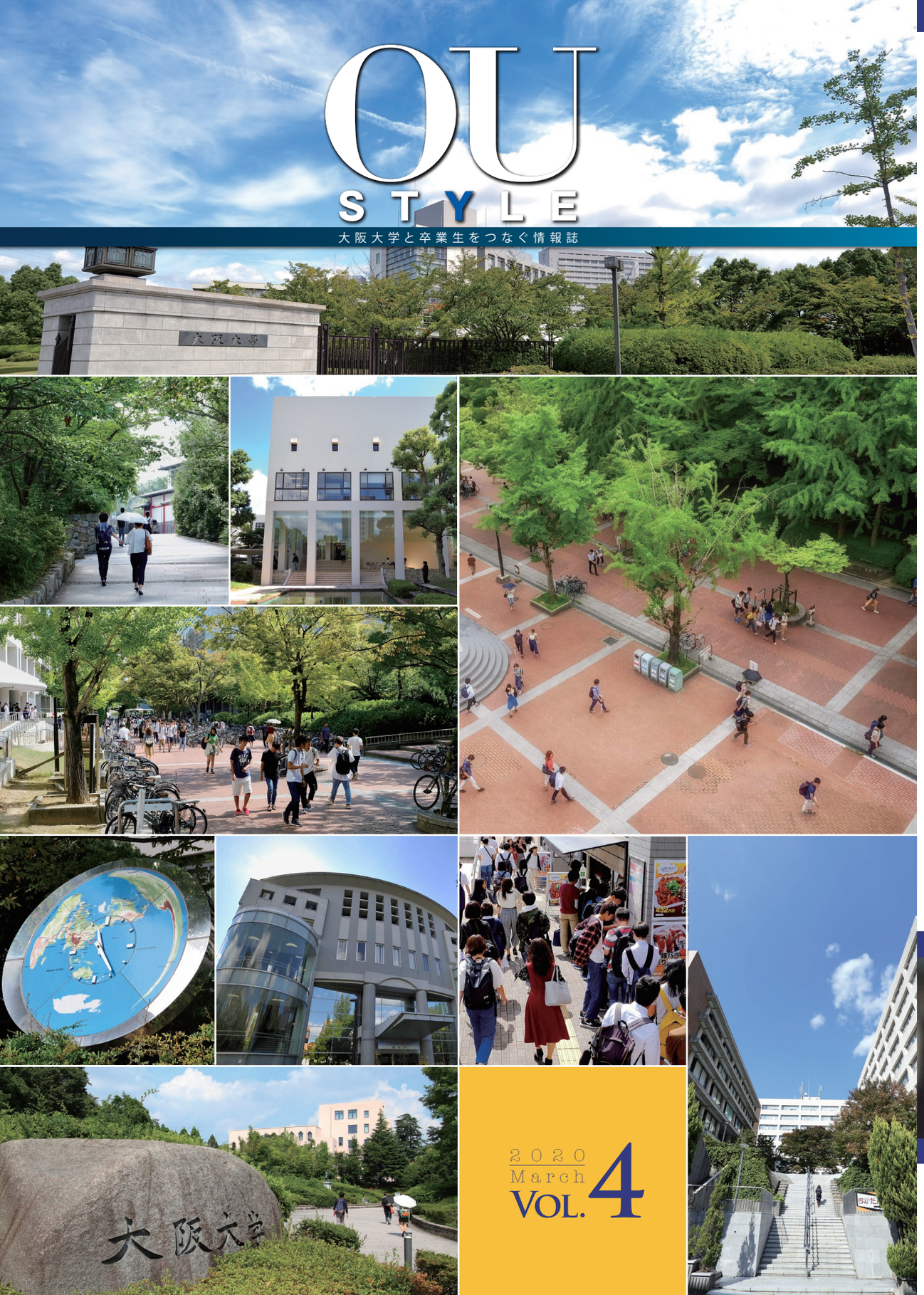
OU STYLE

大阪大学と卒業生をつなぐ情報誌



2020 March VOL.4

想い つなげる つむぎあう 2021 90th OU | 100th OUFS

大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念事業

大阪大学は、2021年に大阪大学創立90周年、大阪外国語大学創立100周年を迎えます。
本学では、この記念すべき年を迎えるにあたり、「想い つなげる つむぎあう」をスローガンにさまざまな記念事業を行います。
その主要事業である「中之島キャンパス再開発事業」「箕面新キャンパス整備事業」を進めるべく、募金活動を行っております。
大阪大学のモットー「地域に生き世界に伸びる」のもとで、世界に向かっての「大阪の顔」としてこれらの共創事業を一層推進していくために、ここに皆様方のご支援を心よりお願い申し上げます。

文化・芸術・学術・技術、四つの知の交差点

中之島キャンパス再開発事業
「中之島アゴラ構想」

中之島センター外観イメージ

中之島センターを改修・機能強化し、産官学民の連携により、文化・芸術・学術・技術という「四つの知」が交差する社学共創、アート、産学共創のグローバル発信拠点を形成します。

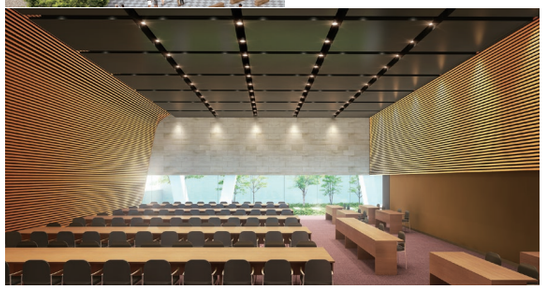
オープンスペース（交流の場）のイメージ

これまでの100年を礎に、次の100年に向けて

箕面新キャンパス整備事業
「大阪外国語大学記念ホール」

教育研究施設イメージ

「大阪外国語大学記念ホール」を教育研究施設内に建設し、「新たな知を共創する場」として国際シンポジウムや市民フォーラムなどに活用します。


大阪外国語大学記念ホール完成イメージ

募金についてのご連絡・お問い合わせ先

大阪大学 未来基金事務局
〒565-0871 吹田市山田丘2-8
TEL:06-6879-8327 FAX:06-6879-4337
e-mail:kikin@office.osaka-u.ac.jp

▲未来基金QRコード

大阪大学カード入会のご案内

「大阪大学ファミリー」のための特別な一枚

大阪大学と大阪外国語大学の卒業生、教職員、元職員だけが持つことのできる、「大阪大学ファミリー」の証。それは、使うほどに母校の支えとなるカードです。カードホルダーの皆様が大阪大学カードをご利用になると、その利用金額に応じた提携手数料が三井住友カード（株）から大阪大学に還元され、教育、研究、学生支援などに活用されます。

国立大学法人
大阪大学／
三井住友VISAカード

▲阪大カードQRコード

入会のお申し込みは大阪大学ホームページから　www.osaka-u.ac.jp/sp/oucard/

大阪大学 OSAKA UNIVERSITY

■ 発行月／令和2年3月
■ 編集・発行／国立大学法人 大阪大学共創推進部渉外課卒業生係
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-8 テクノアライアンス棟9階
TEL.06-6879-7196
■ 編集協力／毎日新聞社大阪事業本部

2020 March VOL.4
OU STYLE
大阪大学と卒業生をつなぐ情報誌

INDEX

3 卒業生インタビュー
会議通訳者
ランプキン朋子さん（大阪外国語大学卒業）

6 OUトピックス
ホームカミングデイ　大阪大学の集い

8 卒業生からの寄稿
私の「阪大のプライド」プロジェクト、第二話
明治初年の大坂にあった幻の「帝国大学」
―ハラタマの舎密局（せいみきょく）と仮病院・大阪医学校―その二
開 祐司（理学部卒業）

15 輝く！卒業生
奮闘！阪大生

16 海外同窓会ニュース
タイ　北米　GAF称号授与

17 各地同窓会ニュース
福井　和歌山

18 キャンパスニュース
大阪大学未来基金「阪大腸活プロジェクト」

19 インフォメーション
2020年卒業生・同窓会イベントのご案内

開 祐司 先生

ランプキン朋子さんとインタビュアーの二人

大阪大学未来基金「阪大腸活プロジェクト」を実施

会議通訳者　ランプキン 朋子 さん

「通訳だから触れられる世界」「面白い」を原動力に

会議通訳者

会議通訳者として活躍するランプキン朋子さん。米シアトルを拠点に、政府や国際会議、民間企業などの重要な会合で通訳を務め、2014年には米オバマ大統領と天皇皇后両陛下（当時）の懇談を担当した。通訳という仕事に必要な資質や醍醐味、これからの時代に求められることなどを、阪大の職員2人が聞いた。

いきなり飛び込んだ通訳の世界

―今日はお会いできるのを楽しみにしていました。まず、大阪外国語大に入学したきっかけからお聞かせください。

ランプキン　英語がやりたい気持ちが強くありました。日本に対する閉塞感があり、学生のうちに海外に行きたいという思いも。「学問としての英文学ではなく、実際に使える英語を習いたい。それやったら外大でしょう」という感じでした。

―どんな学生生活でしたか？

ランプキン　あんまり健全ではなかったです（笑）。当時キャンパスがあった上本町の喫茶店で、何時間も友人たちとしゃべってたりとか。サークルはESSで、ディベートなどに打ち込みました。

―通訳者になろうと意識したのは？

ランプキン　最初から通訳になりたかったわけではないんです。高校の時、同時通訳に関する記事を読んで「面白そうやけど難しそう、私には無理やろう」と思っていました。外大を卒業後、英語が上手になりたくて、奨学金（東西センターEWC）をもらってハワイ大に留学しました。EWCの会議室の同時通訳装置を使ってミーティングをすることになり、そこで「通訳をやれ」と言われて務めたのが初めて。

いきなり飛び込んだようなところがあります。その後、1989〜90年に京都に滞在した時、日本はバブル経済のさなかで通訳の需要が高かった。うまくマーケットにはまって、いろんな人と仕事をする機会を得たり、東京の通訳者とのネットワークができました。

―日ごろの通訳で大変なことはどんなことでしょう。

ランプキン　話をしている人が考えていることや思っていることを、聞いた人の頭の中にどこまで再現できるかということです。単に「DOG」だから「犬」、という言葉の置き換えだったら、それはAIが既にやっています。「この文脈でこの人がこう言っているということは、こういうことを意味しているんだろう」と、聞いた人にわかるようにアウトプットして初めて、人が介在している意味があります。

―では、大切にしていること、心がけていることは。

ランプキン　創作をしないことです。聞き逃したり、わからへんかったというところが出てきたら、そこは訳さない。若い人のトレーニングでも「創る」と言います。創作の世界に陥ると、アウトプットはきれいに聞こえますが、嘘をついていることになります。

―米オバマ大統領と天皇皇后両陛下（現上皇上皇后両陛下）が懇談した時のお話をぜひうかがいたいです。

ランプキン　あのような機会に恵まれたことは幸運でした。オバマ大統領は、私が通訳として同席した時は必ずといっていいほど、相手に「何か運動はしていますか」と聞きました。オバマ大統領もミシエル夫人もエクササイズフリークですし、おそらく彼にとって「安全な話題」だったのでしょう。「運動したくても時間がない」と答えにくそうにされる方が多い中、天皇陛下は「私たちは時間を見つけて宮内庁元職員とテニスをします。そもそも私たちが偶然に出会ったのは軽井沢のテニスコートなんです」と自然に即答されました。両陛下は、通訳者を本当に丁寧に扱ってくださいました。懇談が終わって、オバマ大統領の車列を最後の1台まで見送られた後、こちらに来られて「今日はありがとうございました」と。こんなことをされた方はほかにありません。さすがだなと思いました。

人が介在することの意味＝「付加価値」

―外国語を学ぶ学生にとって、通訳はあこがれの職業です。

ランプキン　私自身、「通訳なんかならんほうがええで」と学生時代に誰かに言われました（笑）。人の言ったことを繰り返しているだけ。自分で考えて、何かを自分で作り出すほうが達成感や喜びも大きいのではないかと。

―でも、文化の壁を乗り越えて、互いに誤解のないように訳さなくてはなりません。

ランプキン　例えば、トヨタは1986年にケンタッキーに北米初の工場を作りましたが、あそこにトヨタ生産方式を持って行くのは並々ならぬ苦労があったと思います。日本のようにテキパキとした仕事を再現しようとしても、文化が違うので大変なんです。生徒が教室を掃除する、給食を残さず食べる、こういう日本の学校では当たり前の生活指導が、アメリカではない。教室の掃除なんか1回もしたことない、スクールランチも好きなものだけ食べて残りは捨てる。そうやって成長した彼らが工場労働者になった時に、日本人同士なら「丁寧に」「きちんと」「心を込めて」の一言で伝わることを、英語で伝えるのはかなり難しい。

そこで言葉を踏み込んで理解し、コミュニケーションを助けるのが通訳の役割です。直接的な訳がない場合、含んだ意図を伝えきれるかということです。日本もこれからどんどん外国人が入ってきた時に、いろんな状況に遭遇すると思います。気分のいい時なら「文化が違うから」と理解を示せても、しんどい状況下で何かを突きつけられた時、クールに判断できるか。単に英単語を覚え、会話ができるという意味ではなく、言語間の価値観の違いを知るという意味で、一般の人も英語を勉強した方がいいと思います。とはいえ、幼いうちは母国語をしっかり身につけることが大事ですが。

―英語上達のコツはありますか？

ランプキン　日本人が苦手な発音を識別すること。特にLとRの区別に苦労するのは、日本語にその区別がなく、かつローマ字のラ行をRで表記しているから。外来語のラ行はLで考えた方が良い。ラ行の発音は舌が口蓋に付き、ローマ字で表すと「R」ではなく「LA、LI、LU、LE、LO」なんです。これは日本語を学ぶ外国人にも言える。音声学的には色々と議論があるのは承知していますが、プラクティカルな観点からは何としても、ラ行のR表記はやめてほしい。

そして、関係代名詞が出てきた時、文章の前の方から順に理解すること。世間では関係代名詞でつまずく人も多い。文が長くなるほどしんどくなるんです。動詞が出てきたらそこで切って理解して、それで問題はありません。

常に世の中への好奇心を

―仕事で落ち込むことはありますか？

ランプキン　いっぱいあります。技術的な話を十分理解できなくて「今日で私の通訳人生は終わりだ」と頭を抱えたことも。

―どういうふうに対応するんですか。

ランプキン　通訳者というのは、細かいところが気になられないと務まりません。でも、あんまり引きずるタイプでもあかんのです。嫌なことがあっても、さっと忘れて、次はしっかり勉強するとか、ポジティブに変換しないと。ずっと落ち込んでしまう人は向いていません。どんな仕事もそうかもしれませんけどね。

一方で仕事の弊害として、家族からは「人の話を最後まで聞かない」と非難されます。同時通訳をしていると、最後まで聞かなくても話の筋が見えるわけですよ（笑）。子供にそう責められて、「もうちょっと簡潔に話せ」と言い返したり。職業病ですね。

―ストレス発散はどのように？

ランプキン　運動は大事です。仕事には移動がついて回るし、時差もある。先日のブラジル出張も、夜行便で行って、翌日の夜行便で帰ってきました。本当に体力勝負です。自宅のあるシアトルでは毎日泳ぐようにしていますし、もっとヨガもやりたいですね。

―「通訳をやっていて良かった」と思う時は。

ランプキン　通訳をやっているから会える人、聞ける話があります。最先端の話題や、企業の経営者が次に考えていることなど、面白くて、職業冥利に尽きます。2010年にトヨタの豊田章男社長が米議会公聴会で証言し、その年に豊田社長とテスラ社のイーロン・マスク社長が会うことがありました。通訳をしていなければ、こんな人たちの会話に耳を傾けるチャンスはありません。この仕事をしていて良かったと思いました。

通訳に必要な資質は、社会のいろんなことに興味がわくか、好奇心を持てるか、その話題を面白いと思うかどうか。それに尽きると思います。一つの仕事が終わってから新聞を読んでいて、「この前の話につながるやん」と気づく。そうやって知識や情報が蓄積されていき、また次回の仕事に役に立つ。一見関係のないようなことも、つながっていると思えるか、そういうことに関心があるかどうかが重要だと思います。

―今日は貴重なお話をありがとうございました。

ランプキン 朋子（ランプキンともこ）

1974年大阪外国語大学英語学科卒業、ハワイ大アメリカ学修士。米国務省契約通訳者などを経て、現在は国際会議や政府関係、民間企業海外IRなどの会議通訳者として活躍。2014年4月に米オバマ大統領と天皇皇后両陛下の懇談、15年4月にはオバマ大統領と安倍晋三首相の会談で通訳を務めた。

■インタビュー
共創推進部 産学共創課　小林加奈（大阪外国語大学卒業）
共創推進部 渉外課　田中秀憲（経済学部卒業）

国際会議通訳の世界に触れる「ホームカミングデイ」

昨年5月3日、第14回ホームカミングデイを開催し、多くの卒業生、在学生、保護者、教職員など「大阪大学ファミリー」が一堂に集まりました。

講演者のランプキンさん

第1部は、会議通訳者として各国要人の通訳としてご活躍のランプキン朋子さん（大阪外国語大学卒業）に講演いただき、まずはホワイトハウスでのステートディナーの話などで笑いを誘い、欧州と米国での通訳現場の違い、通訳におけるAIの可能性、日本の英語教育への提案など分かりやすい例を用いて話され、参加者は興味深く聴き入りました。

その後、応援団が若さと気迫あふれる演舞を披露し、会場を盛り上げてくれました。

第2部の交流会は、株式会社NTTドコモ シニアアドバイザー 山田隆持さん（工学研究科修了）による乾杯の発声で始まり、春の日が差し込む中、久しぶりの再会、新たな出会いにあたたかくも賑やかな歓談の輪が広がりました。

応援団 演舞

司会の
小川真由さん

また、ジョイント企画として大阪大学レゴ部による「レゴ体験ワークショップ」を開催し、たくさんの小中学生がレゴの世界に触れ、楽しいひとときを過ごしました。レゴ部代表の髭野孝寅さん（外国語学部3年）は、「参加者の皆さんにも楽しんで頂けたようで、中には自分たちで改造してしまうような子もいて驚かされました。」と話していました。

レゴ体験ワークショップ

「大阪大学の集い」を香川で開催

昨年7月27日、大阪大学の集いを香川で開催しました。

講演者の山西氏

大阪高等学校全寮歌の合唱

香川いちょう会総会

講演会は、香川に研究開発・製造拠点を持つ一般財団法人 阪大微生物病研究会（BIKEN財団）理事長の山西 弘一氏（医学部卒業・医学研究科修了）から、ワクチンの歴史、今後の新興・再興感染症の紹介を通じた感染症対策の重要性、BIKEN財団が開発した日本発・世界初の水痘ワクチンの紹介、BIKEN財団は設立当時としては画期的なワクチンの製造・開発を行う〝大学発ベンチャー〟であったことなどをお話しいただきました。

交流会は、大阪大学同窓会 香川いちょう会 佐野正会長（工学部卒業）による乾杯の発声で始まり、香川いちょう会有志による大阪高等学校全寮歌の合唱などもあり、懐かしい再会や新たな出会いに会場は大いに盛り上がりました。

また、集いに先立ち地元高校生を対象にした大学説明会、香川いちょう会総会も開催されました。

大学説明会

司会の
吉本津佳沙さん

東京2020オリンピック・パラリンピックを知る「大阪大学の集いin東京」を開催

昨年12月7日、大阪大学の集いを東京で開催し、多くの卒業生などにご来場いただきました。

講演者の河村さん

講演は、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会PRセクレタリーの河村裕美さん（人間科学部卒業）をお迎えし、「東京2020オリンピック・パラリンピック最新情報 ―メガスポーツイベントが社会に与える影響―」と題し、お話しいただきました。

大会をサポートするロボットや携帯電話等のリサイクルによるメダル製作など、東京2020大会における新しい取り組みの紹介があり、これらの取り組みを通じオリンピック・パラリンピックがアクセシビリティや資源に配慮した持続可能な社会の実現を目指していることなどをお話しいただきました。

交流会では、参加者は久しぶりの再会や新たな出会いを楽しみました。また、講演会に続き総合司会を務めたNHK大阪放送局スポーツキャスターの山本賀保子さん（外国語学部卒業）の明るく和やかなリードなどで、会場は大いに盛り上がりました。

司会の山本さん

交流会の様子

応援団 演舞

私の「阪大のプライド」プロジェクト 第二話

明治初年の大坂にあった幻の「帝国大学」

―ハラタマの舎密（せいみきょく）局と仮病院・大阪医学校―その二

京都大学名誉教授
開　祐司
（1975年理学部卒業）

前回は明治初年の大坂を語る上で欠かせない人物として、薩摩藩の家老・小松帯刀に登場してもらった。今回は、その小松が構想した大坂遷都論から書き始めることにする。

【小松帯刀の大坂遷都論】

小松は幕末に至る頃には古色蒼然とした公家体制が染み込んだ京都に天皇をおいたままで新政府をつくるつもりはなく、少なくとも大坂には引っぱりだすつもりだった。この考えは、彼と共にはたらいた西郷や大久保、それから後に商都大阪を準備することになる五代友厚らにも共有されていた。これが慶応四年（1868年）一月に大久保利通によって唱えられた「大坂遷都論」である。実際、この方針に従って明治天皇は京都から大坂に行幸して滞在すること四十日余りを過ごしている。そして、還幸の前日に天皇は豊太閤祠殿造営や病院建設の御沙汰書を下した。これに呼応して動いていたのが総裁局顧問兼参与・外国事務局判事で大阪府知事でもあった後藤象二郎と小松帯刀（1）である。まさにこの病院がやがて大阪府医学校病院となり阪大医学部へと続いていくことになる。

ここでいう大阪府は現在のような地方自治体のことではない。廃藩置県前の太政官制のもとでの「府」は、京都府にしろ東京府（東京に改称されるまでは江戸府）にしろ政府が直接に統治する地域の行政機能をもった機関のことである。だからこの仮病院なり医学校なりは、維新政府としては国家レベルの組織であるとみなければならない。明治四年の廃藩置県以降の大阪府ではない。薩英戦争以来、西欧諸外国との案件の処理において小松は日欧の双方から信頼されて中心的な役割を担う立場になっていた。上記の「外国事務局」というのも新政府の外務省が大阪にあったという具合に考えると分かり易い。

大坂遷都論は、現在では明治元年に半年ほどの命脈を保っただけの幻のように紹介されるにすぎないが、倒幕による政治体制の変革を企てている薩摩からみれば実に現実的な首都構想である。大政奉還あたりから薩摩は明らかに、徳川将軍家を新時代の政治体制から排除するためには徹底的な倒幕が不可欠であると判断していた。西郷などは全くそのつもりで江戸城を囲んでの一戦を想定して官軍を進めている。幕末の日本で維新後に首都機能をもちうる都市は、各藩が屋敷を構える江戸、京都、大坂の三つしかない。予想された成り行きは、当然この最後の決戦で江戸が壊滅する事態であるから、誰が考えても大坂遷都は理にかなっている。

ただ、四月には江戸城の無血開城という想定外の展開があって江戸が無傷で残った。それなら江戸への遷都は自然な選択である（2）。そこで、戊辰戦争に目鼻がついた九月に江戸を東京と改称して明治元年が始まることになったのである。天皇が東幸して、首都機能はその後数年をかけて東京に集約されていった。江戸の代わりに壊滅した会津のことを想起すれば、江戸城の無血開城がなければ東京遷都はなかっただろうと思われる。こうして慶応四年／明治元年（1868年）年初の王政復古以来、首都大坂を想定して進められた事業が明治二年や三年に至って現実に姿をあらわすことになった。現在も大阪に造幣局があるのは、このためだ（3）。大阪に設立された仮病院と医学校もこの例に漏れない。

【幕末の理化学教育と舎蜜局】

仮病院と医学校だけならば医科に限られた話で、幻の（大阪）帝国大学物語にはならない。維新後の日本が帝国大学を設置していったのは、実際のところ医学のみならず西欧近代の理化学を受容・伝達する役割を課してのものだった。蘭方医たちが薬の知識に敏感であるのは当然で、その基盤となる化学の受容には特に熱心だったはずである。その窓口となったのが医学校とセットで設立された『舎密局』で、ここで西欧近代が生み出した実験化学が日本で初めて本格的に教授された。

幕末の頃、攘夷をとなえる尊王の志士たちよりは江戸幕府の幕閣の方がはるかに開明的で、ペリー来航（1853年）の翌年には長崎でオランダの援助のもとに海軍伝習を始めている。そのために派遣されたオランダ軍医ポンペ（J.L.C. Pompe van Meerdervoort）に、幕府は西洋医学の組織的な教授を依頼した（4）。文久二年（1862年）に五年間の滞日を終えて帰国したポンペの後に着任したのが、同じくユトレヒト陸軍軍医学校出身のボードウィンだった。彼は長崎に開設された医学校である長崎精得館で医学伝習をはじめたのだが、伝習生たちには科学的基礎知識が欠けていることを悟った。そこで彼は、理化学教育を医学教育から独立させるべく近くに分析究理所を設けて、ここに理化学を専門とする教師を招聘することを建言した。これに応える形でハラタマ（K.F. Gratama）が迎えられることになったのである（5）。ハラタマはユトレヒト大学でPh.D.をとったが、日本行きが決定して急遽、医学博士も取得した。それで1866年（慶応二年）の来日後には、ボードウィンの代理で患者の回診もおこなった。精得館には、幕府医官の松本良順や適塾関係では洪庵の嗣子緒方惟準や長与専斎も参加している。分析究理所におけるハラタマの主な任務は、化学、物理学、薬物学、鉱物学、植物学などの講義であった。分析究理所には当時のヨーロッパの化学実験室にある器具が一通り送られてきていて（この時はまだ開梱されていない）、ハラタマがユトレヒト大学で行っていた教育の水準をそのまま移した高度なものであったと推察されている。

ハラタマを得たボードウィンは、日本に西欧医学を導入する使命感のもとに医学校と理化学校を日本の中心地である江戸に移すことを幕府に建言した。幕末の緊迫した情勢の中で、幕府がこれに応じた。これは、将軍の在所である江戸に西欧人を招聘して直轄の学校を主宰させるという前代未聞の画期的決断であった。こうして幕府はハラタマとの間に理化学校での教授について三年間の契約を結んだ。それで、1867年（慶応三年）、ハラタマは長崎を発って江戸の開成所に移った。しかし、彼が開成所で理化学校の新築を待ちあぐねているうちに幕府は崩壊してしまった。ハラタマが開成所に移った頃、ボードウィンは江戸に新しく建設する医学校のための器材や薬品調達のために一時オランダに帰国していた。こちらも再渡来したときにはすでに江戸は維新の動乱の渦中にあったから、上海に難を逃れることになってしまった。

写真1．大坂に設置された「舎密局」本館
（芝哲夫著「オランダ人の見た幕末・明治の日本」〈菜根出版、1993年〉に掲載されたハラタマコレクションの写真より転載）

写真２．舎密局開校記念写真（「写真集 大阪大学の五十年」より転載）
前列右から三崎嘯輔（舎密局助教）、ハラタマ（舎密局教頭）、一人おいてボードウィン（大阪医学校教頭）、後列左から二人目が緒方惟準（大阪医学校校長）

右大臣三条実美に理化の二学は日本の富強の基をなすものだから必要であると建言して、幕府が江戸に設立予定だった理化学校を大坂に移すことが決まった。実際に六月にオランダ領事およびハラタマと会談して「分析舎密方」を大坂に設置することを取り決めたのも小松帯刀であった。七月末には、小松が江戸の開成所に移されていた分析機器を伴って横浜を出発している。彼らはボードウィンとハラタマを大坂に呼んで、医学校と理化学校を中心とした新しい総合大学を新首都と目される大坂で実現しようとしたのである（5）。この頃、七月一七日に江戸は東京と改称され、その裏では会津戦争が戦われようとしていた。会津が降伏する九月には天皇の東幸となって、結局、大坂遷都は実現しなかった。

【大坂の舎密局と医学校・病院】

１８６８年（慶応四年）に徳川幕府が倒れると、幕府がボードウィンやハラタマと結んでいた契約を明治新政府が引継ぐ立場にあった。これを担当したのが外国事務局であった。後藤象二郎と小松帯刀が連名で

それでも十月にはハラタマの設計になる斬新な意匠の舎密局の建設が大坂で開始された（写真１）。この時大阪府が示した布告には、舎密局、医学校、洋学校、病院をあわせた総合大学構想が示されている（6）。紆余曲折はあったものの、舎密局は翌明治二年に完成した新校舎においてハラタマを教頭として五月一日に開校した（写真２）。

ハラタマは多くの来賓を前にして開校講演を行い、その内容は助教の三崎嘯輔によって通訳されて参会者に伝えられた。後に、その講演内容は『舎密局開校之説』として刊行されている（5）。芝先生は著書のなかで、この講演でハラタマは「この国に今もっとも重要な学問は理化二学、すなわち物理学と化学である。〈中略〉これら理化二学は決して思索の産物ではなく、実験をもって証明されなければならない」と強調したと述べられている。今から見てもそれは格調の高い講演であったようだ。ハラタマがオランダから送らせた理化学実験器具と薬品もついに開梱されて、ここに日本で初めての本格的な実験化学の教授がおこなわれることになったのである。

一方、ボードウィンの上海からの来日は遅れて明治二年一月末となったので、医学校病院の建設は舎密局より遅くなった。そこで、明治二年二月に大阪府の仮病院として用意された大福寺の仮病院でボードウィンは早速に患者の治療と講義を開始した。この仮病院の院長は緒方惟準がつとめている。惟準は長崎精得館でポンペやボードウィンに学んだあと、１８６５年（慶応元年）に幕府の命で帰国するポンペに随ってオランダに留学した。明治元年七月に帰国して十月には東京医学校と大病院の取締りとなったが、翌年にはこれを辞して大阪にもどったのである。明治二年七月に大阪府病院が舎密局の南１キロメートル（大阪市法円坂町二番地）に修築竣工して開院した。十一月には大阪府医学校病院が開校した。

舎密局、大阪府病院に続いて明治二年九月には仮洋学校が天満川崎に発足した。ここでは英学・仏学・数学・法学などが教授されることになっていた。こうして明治二年の大阪に、西欧近代の高等教育を提供する帝国大学の原型が一旦は姿を現すことになった。その後は首都東京の建設へと全てが収斂されていったので、この体制はハラタマの雇用契約がきれる明治三年末までの短い間しか維持されなかった。しかし短いながらも大阪に実現された近代的な大学構想は、その後に明治・大正を支える多くの人材を生み出す契機となった。舎密局は近くにできた医学校と交流する形で運営され、多くの医学生が舎密局の講義を聴講にきた。

例えば、医学校から舎密局への聴講生名簿の中に明治三年に加賀藩から医学修業のために大阪に出てきた高峰譲吉の名がある（5）。大阪で実技をともなう化学の基礎を学んで、彼は志望を医学から化学に変更した。明治五年には工部省工学寮（後の東京帝国大学工学部）にすすんで化学の道にまい進した。これが後年、消化酵素タカジアスターゼの発見、副腎ホルモン・アドレナリンの抽出結晶化など、当時の世界的レベルでの業績をあげる化学者を誕生させることになった。

【文部省の設置と学制発布によって幻となった大阪の帝国大学】

舎密局は明治三年十月に洋学校と合併して大阪開成所となり、開成所内理学所と呼ばれるようになった。しかし、東京遷都が本格化して明治四年に文部省が設置されると、高等専門教育を東京一極に集中させるべく方針が立てられた。ハラタマの後任であったドイツ人リッテル（H.Ritter）をはじめ理化学専門教師はハラタマ以来のオランダ渡来の実験器具・薬品と共に全て東京に移された（6）。その結果、大阪開成所は明治五年八月より第四学区第一番中学校と改名されて、普通高等教育の学校とされた。

同じく政府レベルの組織であった大阪医学校は、明治四年に大阪、京都、兵庫など二府十一県からなる第四学区に編入され、一旦は地域を代表する医学校とされた。しかし、そのあと唐突に廃校とされた。教官も医官も第一学区の東京医学校に集中させることになったからである。大阪医学校の廃校とともに、東京で必要とされる機器や器材、書籍や薬品なども速やかに引き上げられてしまった。やがて、これが東大医学部となった（7）。

写真３．舎密局址の大楠（2018年10月筆者撮影）
背後の旧警察会館は、この年の夏から解体中で周囲が塀で囲われていた

【舎密局址の大楠】

私の「阪大のプライド」プロジェクト第一話で、２０１６年２月に阪大渉外本部の方が京大に私を訪ねてこられたことに触れた。その時に「西欧近代の化学が日本で初めて教授されたのが大阪だって知ってます？」的な話を、ちょっとした大阪自慢のようにしてみた。これをきっかけに思い立って、脳裏に残る「舎密局址」の石柱を確かめようと何十年ぶりかで出かけてみた。

大阪メトロ谷町線・谷町四丁目駅で下車して谷町三丁目の交差点を東に緩い坂道を上っていくと、本町通りの歩道上にたつ楠の大木に出くわす（写真３）。この木を避けるように歩道は内側にへこんでいる。「舎密局址」と書かれた石柱と石碑が実はその根元に立っていたことにはじめて気づかされた。四十年ほども前に結婚披露宴をおえて警察会館からでてきた私には、足下の歩道の端に立っていた石柱だけが突然に目に入ってきた。しかし、この大楠の全体像が収まるような遠景は全く記憶になかった。こうしてみるとおそらくは道路を拡幅する際に車道側がそぎ落とされたのだろうが、もとはこの楠木を低い石垣が円形に囲んでいたことが容易に見てとれる。

あれ！これって、どこかでみた気がする。「そうだ、これは京大のクスノキだ」（写真４Ａ）と思った途端、ゾクっとした。京大では、時計台とともにその前に植わっている楠木が自らの誇りの象徴として大切にされている。

写真４．(A)京都大学時計台前の楠（2018年7月筆者撮影）と
(B)京大のエンブレム

京大のエンブレムにはこのクスノキがデザインされている（写真４B）。目前にたっている舎蜜局址の楠木が京大時計台前の風景とダブってみえたのだ。歩道を巡って進むと新しめの石碑があって、その碑文がすぐに答えをくれた。中身が東京に去った舎蜜局は、その後たびたび名称を変えながら明治一九年（１８８６年）には第三高等中学校となり、明治二二年に京都市吉田町に取得した新校地に移転するまで大阪にあった。さらにこれが明治二七年（１８９４年）に旧制第三高等学校となったとある。そして明治三〇年（１８９７年）に京都帝国大学が発足した。この時、三高は帝国大学のために土地建物を譲り、京都府が寄附したその南側に対面する場所に移って現在に至っている。こうしてみると現在の京大時計台前の場所はもとの三高正門前の広場であったことになる。低い石垣で広く円形に囲んだ楠木の風景は、舎蜜局の残り香と共に京都に移って、やがて京大正面を飾るクスノキとなって復活したのだ。この新しめの石碑は昭和五四年（１９７９年）に三高同窓会が建てたと彫られているから、１９８０年に舎蜜局址の石柱と出合った私の目に入ってもよさそうなものだが、覚えていない。京大時計台前の楠木は植え替えられて、エンブレムにあるような形に維持されてきた。一方で大阪の舎蜜局址にたつ楠木は明治のままに残されて、グロテスクなまでに巨木となった（8）。

【幻の帝国大学、復興の夢】

こうして舎蜜局は、東京のみならず京都の帝国大学の礎となって大阪から消え去った。小松帯刀が病死した明治三年に開成所となった舎蜜局は明治五年に閉校となったあと、第四学区第一番中学校、大阪開成学校、開明学校、大阪外国語学校、大阪英語学校、大阪専門学校、大阪中学校、大学分校、第三高等中学校とたびたび名称を変えて明治二二年まで大阪にあり続けた。大阪大学五十年史（6）が創立前史として適塾に続いて明治初年の舎蜜局から説き起こしていることは不思議ではない。しかし、京都大学百年史の創立前史（9）もやはり「舎蜜局の時代」から始まることに気づいている人は少ないと思う。私が京大に赴任した１９９８年は京大百周年の翌年にあたる。この年にちょうど完成したばかりの百周年史が配布されて私の教授室の書架にも置かれている。一昨年の冬に舎蜜局址の大楠の下で「ひょっとしたら、これが京大になったんだ」と思いついて百年史を手に取ってみると、まさしく冒頭の百数十ページが京大が大阪から京都にやってきた経緯に費やされていた。新鮮な驚きだった。

京大の知人に話すと、三高が京都にきたのは大阪が熱心に誘致しなかったから当然だという感じの反応だった。確かに商都大阪は経済活動に熱心だが、あたかも学問を軽視しているかのような言い草は納得できなかった。これは京都からみた歴史なのだろうが、私には少し違ってみえる。明治日本の首都が江戸から名前を変えた東京に決まると、舎蜜局も医学校・病院も瞬く間に東京に移っていったのと同じく、あらゆることが東京一極に集中するようになった。それは至極当然ではあるが、その裏側で取り残された京都も大阪も急速に衰えていった。明治元年から二年にかけて天皇が本格的に東京に移ってしまうと、千年の都・京都の衰勢は覆うべくもなくなる。そこで高等教育機関を誘致して、文化都市・京都の面目を回復しようと誘致活動に熱がこもったのは当然だったろう。薩摩を中心とする明治新政府も、これを支援して京都を見捨てない姿勢を示した。このような背景のもとで、第三高等中学校の京都への転出は京都と大阪の誘致合戦というよりは政府の方針として勝負がついていたのではないかと思われる。

表向きは石高制であった江戸時代でも貨幣制度が安定してくると武士が米を貨幣に替えて都市生活を送るようになる。そうなると、貨幣経済はますます浸透する。そこに商都大坂の繁栄があるのだが、そもそも大坂は天領であり江戸幕府の政治システムのもとでの繁栄という構造になっていた。倒幕によって、これが崩壊してしまえば大混乱は必然である。金本位で動いていた江戸の貨幣経済に対して大坂は銀本位であったので、ますます混乱に拍車がかかった。小松帯刀に重用された五代友厚は小松亡きあと彼の側室と子の面倒をみただけでなく、商都大阪の復興に決定的な役割を果たしたことはよく知られている。彼の作った商業学校は現在にまで続くが、小松の作った舎蜜局は名前を変えながら彼の死後二十年間も大阪にあったものの、ついに京都に去ったことになる。興味深い事に、舎蜜局の後身である大阪英語学校とこれに続く大阪専門学校に学んだ生徒に、後に大阪帝大初代総長となる長岡半太郎の名がある。昭和となってからの阪大創立に連なる因縁めいたものを感じさせる。まさに舎蜜局が大阪の将来に落とした種子であったことになる。

一方、明治期を通じて大阪で維持された医学校と病院は、医学校長・病院長となった佐多愛彦が中心となって大正四年（１９１５年）に大阪府立大阪医学校を専門学校令準拠のまま大阪府立医科大学へと改組した。これがさらに大正八年（１９１８年）に大学令に準拠した大阪医科大学となった。この間、一貫して学長の任にあった佐多は並々ならぬ情熱とともに、当時大阪府知事だった大久保利武（大久保利通の三男）の協力のもとに大阪帝国大学創立の基盤を作っていった。佐多自身は薩摩藩知覧島津家の分家出身であるから、ここでも小松にはじまる薩摩の恩恵を受けたことになる。

明治初年を記憶する大阪が帝国大学を誘致するにあたって、医学校だけではなく失ってしまった舎蜜局を回復して理科大学を興そうとしたのも自然だろう。実際、大正五年（１９１６年）に大阪医学校を卒業して医師となっていた塩見政次によって、これが実現する。彼は医業を続ける傍ら自ら化学鉱業の会社も興したので、三九歳の若い死を前にして私財を理科大学の母体を作るべく医科大学長の佐多愛彦に託した。その結果設立されたのが財団法人塩見理化学研究所である（10）。これによって、わが国における「先例なき純学術研究所」が創設された。高峰譲吉の提唱に従って国家的事業として政府が東京に理化学研究所（理研）を設立したのは翌年の大正六年（１９１７年）である。私財によって賄われたこの塩見理化学研究所が理研に先んじて設立され、これが大阪帝大理学部となっていったのだから大阪人はこれを誇ってよいと思う。

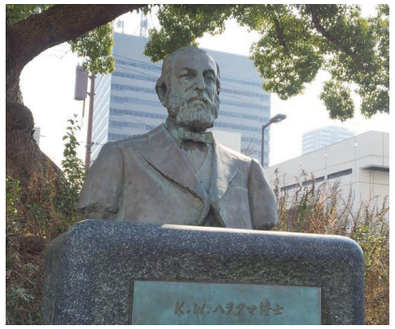


写真5. 舎蜜局址に建立されたハラタマ博士の胸像
（2016年2月筆者撮影）

【結語】

これが大河ドラマのなかで大坂で終焉をむかえた小松帯刀をみた私の脳裏に浮かび上がった「大坂にあった幻の帝国大学物語り」である。そう思って手許の文献を調べはじめると、ますますこれが歴史的事実ではないかと思うようになった。赤堀四郎先生の蛋白質研究所を慕って大阪に出てきた私としては、わが国にはじめて西欧近代の理化学をもたらしたハラタマと舎蜜局のことは阪大理学部に長く記憶されてよいと思っている。私は阪大歯学部生化学教室でキャリアをスタートさせたので、研究者としては医科学周辺の領域を歩いてきた。そんな関係で理学部との縁が薄くなってしまい、現在、ハラタマのことが理学部でどのように顕彰されているのかよく知らない。ただ、現在も大坂の舎蜜局とハラタマの功績が文献に残されているのは理学部化学科の教授としてのみならず化学史家としての芝哲夫先生の功績によるところが大きい。ハラタマはオランダに帰国後デン・ハーグ陸軍病院長などを歴任して、１８８８年に五六歳の生涯を閉じた。

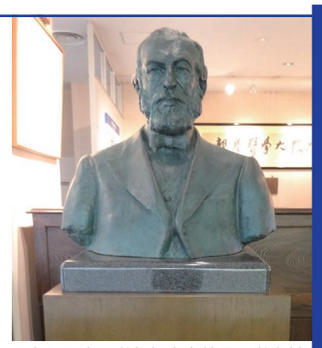


写真6. 阪大医学部銀杏会館の医学史料展示室に置かれたハラタマ博士の胸像（2016年8月筆者撮影）

昭和六三年（１９８８年）には、大阪にハラタマの子孫を迎えてハラタマ博士没後百年記念講演会が開催された。平成一二年（２０００年）の日蘭交流四百年記念の年には「第一回ハラタマワークショップ―持続可能な社会のための化学と化学技術―」が大阪大学で開催された。これを機会に大阪城の西にある舎蜜局址の大楠の下にハラタマ先生の胸像が建立された（写真５）。どうりで１９８０年に私が初めて舎蜜局址の石柱に出くわした時の記憶にこの胸像がない訳である。

平成二八年（２０１６年）の夏、阪大生命科学図書館に「勿嘗糟粕」と書かれた長岡半太郎初代総長の扁額を訪ねた帰りに、医学部学友会館・銀杏会館にも立ち寄ってみた。一階の医学史料展示室に入ると、まず左手にある緒方洪庵の座像に出会う。数歩進むと、右手に思いがけず舎蜜局址でみたハラタマ先生の胸像に出くわした（写真６）。まるで、エジプトのピラミッドに迷い込んでファラオの像に出くわした気分だった。本来ハラタマは舎蜜局の教頭であったが大阪府病院では副病院長格でボードウィンの代診も行ったから、医学史料展示室に胸像があっても不思議ではない。しかし、史料展示室にはボードウィンの功績についてはしっかりと記載があるものの、ハラタマについては何も記載がない。舎蜜局を知らない医学部関係者には、この胸像がなぜ医学史料展示室にあるのか見当がつかないに違いない。

開 祐司（ひらき ゆうじ）

富山県生まれ。1975年大阪大学理学部化学科卒業。81年大阪大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学。理学博士。同年大阪大学歯学部助手、米国留学・研究員を経て、同講師、同助教授。98年京都大学再生医科学研究所教授。2015年同大ウィルス・再生医科学研究所所長、18年から同大名誉教授。

● 参考資料と注

（１）慶応4年1月、新政府は小松帯刀を参与で外国事務掛に任じた。その後すぐに官制は外国事務局（現在の外務省）となった。総裁局顧問の小松は3月に外国事務局判事兼勤となり、5月には土佐の後藤象二郎と共に内外政担当の「大阪府」の知事を命じられた。小松はやがて初代宰相のような重要任務につくことが予定されていたらしい。

（２）江戸無血開城のすぐあと、大久保利通に「江戸遷都論」という建白書が届いた。書いたのは前島密である。以降、東京遷都が政府の方針となっていった。京都ではいまでも「天皇さんがちょっと東京にいってはるだけで、すぐにかえってきはる」という。

（３）慶応4年2月、五代友厚は小松帯刀と同じく新政府の外国事務局判事として大坂在勤となる。新政府はこの頃、造幣工場を大坂に建設する事を決め、五代はイギリス商人グラバーを通じて香港にあった造幣工場の機械一式を購入する契約を結んでいる。これを使って明治3年（1870年）に当時世界最大規模の造幣寮が竣工した。

（４）2000年になって日本人の手になるポンペ講義録6冊が発見され、その1冊が翻訳された。それが「ポンペ化学書―日本最初の化学講義録―」芝哲夫訳（化学同人、2005年）である。

（５）「オランダ人の見た幕末・明治の日本」芝哲夫著（菜根出版、1993年）「序章」ハラタマと日本 pp. 1-31、「日本の化学の開拓者たち」芝哲夫著（裳華房、ポピュラーサイエンス279、2006年）pp. 39-50『舎密局開講之説』は国立国会図書館からインターネット公開されている。（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/995080参照）

（６）「大阪大学五十年史 通史」（大阪大学、1985年）第1編 第1章 第２節 舎密局 pp. 6-12

（７）「大阪大学五十年史 通史」（大阪大学、1985年）第1編 第２章 第１節 大阪府医学校病院の廃止と再興 pp.15-17 東京に機器や器材、書籍や薬品などが全て引き上げられたのだが、大阪医学校で使用した英語の書籍は不要とされた。東京の大学東校ではすでにドイツ医学の採用が決定していて、大阪のオランダ医学／イギリス医学の方向性は捨てられた。その後も続く疫学的実証主義のイギリス医学と病因の理論構築をもとめる東大のドイツ医学との相克物語は吉村昭の小説「白い航跡」（講談社文庫）に詳しい。

（８）ハラタマが教頭をつとめた舎密局の所在が、正確に現在の楠と石碑が置かれた場所であるか、長らく議論があった。これも芝先生の御研究によって、現在の位置より北へ300m隔たった大手通南側であると確定された。現在の大阪国際がんセンターの北西角辺りにかさなる。

（９）「京都大学百年史 総説編」第1編、第１章 創立前史（京都大学後援会、1998年）

（10）「塩見理化学研究所小史」芝哲夫著（大阪大学史紀要、3巻、pp.31-43、1983年） 塩見理化学研究所ははじめ建物なしで設立されたが、大正14年に医科大学病院に隣接する北区堂島浜通3丁目1番地に完成した。この建物は、阪大創立当初は理学部の研究や授業のために使われたし、著者が学生時代を送った70年代に至っても癌研究施設として使われていた。

私の「阪大のプライド」プロジェクト第二話　明治初年の大坂にあった幻の「帝国大学」―ハラタマの舎密局（せいみきょく）と仮病院・大阪医学校―その二　開 祐司さん
日本国際賞　野口英世記念医学賞　サイエンス・インカレ　関西インカレ

☆ 輝く！卒業生 ☆

「日本国際賞」理学研究科修了の岡本佳男さんが受賞

2019年Japan Prize（日本国際賞）に岡本佳男さん（理学部卒業、理学研究科博士課程修了）が選ばれました。

この賞は、全世界の科学技術者を対象とし、独創的で飛躍的な成果を挙げ、科学技術の進歩に大きく寄与し、もって人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められる人に与えられるもので、岡本さんは「らせん高分子の精密合成と医薬品等の実用的光学分割材料の開発への先駆的貢献」が評価されての受賞となりました。

「野口英世記念医学賞」医学研究科修了の飯田哲也教授が受賞

第62回野口英世記念医学賞に本学微生物病研究所 飯田哲也教授（医学研究科博士課程修了）が選ばれました。

この賞は、野口英世博士が生前に行った感染症研究に関係の深い医学研究に対して、その功績を表彰するものです。受賞研究課題は「ビブリオ属細菌のゲノムと病原性に関する研究」で、飯田教授は食中毒の原因菌「腸炎ビブリオ」を中心に、細菌が病態を発症するメカニズムについて、研究を展開しています。

奮闘！阪大生

第８回 サイエンス・インカレで本学の学生が受賞！

昨年3月2日、3日に開催された文部科学省主催の第8回サイエンス・インカレにおいて、本学から8名の学生が受賞しました。

●文部科学大臣表彰
理学部 3年 福山紘基さん

●サイエンス・インカレ審査員特別賞
理学部 2年 金子悠仁さん
3年 川上結生さん
3年 藤井匠平さん

●ファーウェイ賞
基礎工学部 4年 佐藤優志さん

●SCREEN賞
理学部 3年 守友暁寛さん

●日本ヒューム賞
工学部 1年 山下龍之介さん

●サイエンス・インカレ・コンソーシアム奨励賞
基礎工学部 4年 稲垣理也さん

関西インカレ陸上競技男子1部 4×400mリレーで阪大陸上部が初優勝！

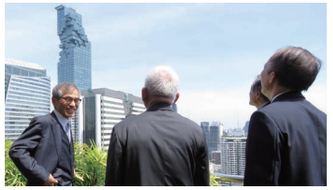
昨年5月19日に奈良市鴻ノ池陸上競技場で行われた「第96回関西学生陸上競技対校選手権大会」の男子１部4×400mリレーにおいて、阪大陸上部が3'09"81で見事優勝を果たしました!

関西地区の強豪校が揃う男子１部トラック種目での優勝は快挙であり、記録も大学ベスト記録を更新しました。

タイ同窓会を開催

昨年7月13日にバンコクのザ・バンコククラブにて、大阪大学タイ同窓会・大阪外国語大学同窓会（咲耶会）が開催され、卒業生ならびに留学経験者など、約70名が集いました。

本学卒業生3名（ジェトロバンコク事務所・高谷浩一氏、情報科学研究科・東野輝夫教授、TÜVSÜD（Thailand）Ltd.：Dr. Duangkamol Kamolyabutra氏）による一般公開講演会、Global Alumni Fellow授与式、懇親会を実施し、参加者は親交を深め、盛況のうちに閉会となりました。



北米同窓会を開催

昨年9月21日にカリフォルニア州バークレー市にあるDavid Brower Centerにて2019年度北米地区同窓会・総会が開催され、アメリカ各地から46名が集いました。

生命機能研究科に所属し現在UC Berkeley心理学部で研究をされている村井祐基氏に講演いただいた後、恒例の阪大クイズで会場は大いに盛り上がり、参加者同士の交流を深め、盛会のうちに終了しました。

Global Alumni Fellow

「Osaka University Global Alumni Fellow」を授与

「Osaka University Global Alumni Fellow」は、大阪大学の国際的なネットワークを拡大する一環として2015年2月に創設した称号で、大阪大学を卒業（勤務）後、海外の大学や企業などで目覚ましい活躍をされている方に授与しています。

2019年度は以下の3名の方を含めた11名に授与しており、これまでの授与者は48名となりました。

（左）Dr. Anas Miftah Fauzi　ボゴール農科大学 教授

（左）Dr. Ho-Sup Jung　ソウル大学校 教授

（左）Dr. Wanbin Zhang　上海交通大学 教授

「福井県同窓会総会」を開催

昨年8月25日、大阪大学福井県同窓会の定期総会が福井市内のホテルで開かれました。

前田征利会長（基礎工学部卒業）をはじめ会員93人が参加。設立3周年を記念した特別講演では、伊藤忠商事の小林栄三特別理事（基礎工学部卒業）が世界や日本が直面する課題を展望した上で、古里福井の一層の飛躍に向け行動していこうと提言しました。引き続き懇親会もあり、会員が近況報告のスピーチをしたり、大学側からは指定国立大学法人になったことなどが紹介されたりしました。最後は「全寮歌」を全員で合唱して大いに盛り上がりました。また、会場の一角には図書館司書の会員が移動図書館のコーナーを開設し、阪大卒業生らの書籍を並べて注目を集めていました。（記事・写真提供 福井県同窓会）

小林さん

移動図書館

「和歌山阪大会総会」を開催

和歌山阪大会の第44回総会が1月25日、和歌山市内のホテルで開かれ、約50人が参加しました。会長を務める小畑産業株式会社代表取締役会長の小畑英三氏（工学部卒業）が「今後も『ワンチーム』で活動したい」と挨拶し、事業・会計報告が行われました。

大阪大学 金田安史理事・副学長の「大阪大学の産学共創の取り組み」と題した基調講演では、基礎研究の大切さと、それをライセンスに結び付ける重要性などを強調し、続いて共創機構の新たな改革やオープンイノベーション機構の発足、研究開発エコシステムの全学的取り組みなども紹介しました。最後に阪大が求める理想の社会として「個々人が社会で活躍できる寿命の延伸」を掲げました。

懇親会では、2021年の周年記念事業への募金協力などもお願いしました。

金田理事・副学長

小畑会長

「2020年卒業生・同窓会イベント」のご案内

12月5日（土）　大阪大学の集いin東京　東京国際フォーラム（東京・有楽町）

[各学部同窓会イベント]

理	5月18日	理学部生物同窓会／70周年記念の会	理学部J棟2階南部陽一郎ホール
工	5月22日	工業会東京支部／総会	東京　学士会館
経	5月28日	東京待兼会／総会・懇話会・懇親会	東京　学士会館
工	6月10日	工業会総会	大阪 ヴィアーレ大阪
工	6月24日	工業会大阪支部 講演・見学会	日本製鉄株式会社 製鋼所
外	7月18日	咲耶会東京支部／ビアパーティ	東京　ライオン銀座7丁目店
法	7月18日	青雲会／総会	大阪　太閤園
外	10月10日	咲耶会東京支部／総会	東京　学士会館
工	10月10日	庚子造船会／創立百二十周年記念行事　※5月30日開催予定から変更	大阪大学銀杏会館
外	10月25日	咲耶会／総会	大阪大学会館
外	11月　1日	ありがとう&さようなら箕面間谷キャンパス　10月31日・11月1日語劇祭同時開催	箕面キャンパス A棟416大講義室ほか
微	12月18日	微生物病研究所同窓会／総会・懇親会	大阪大学微生物病研究所 融合棟1階 谷口記念講堂

[職域同窓会イベント]

11月　8日	パナソニックいちょう同窓会／総会	大阪　ホテル・アゴーラ大阪守口

※新型コロナウイルスの状況によっては、開催を中止または延期する可能性があります。
詳細は各同窓会にご確認願います。（2月末現在）

大阪大学共創推進部渉外課卒業生係
Tel 06-6879-7196　Fax 06-6105-5982

■E-mail（お問い合わせ専用）
alumni-info@ml.office.osaka-u.ac.jp

OU Mail News メールマガジン

卒業生のためのメールマガジン、OU Mail Newsを毎月配信中。大学の旬な話題やイベント案内、お得情報なども拡充してお届けしています。
ご希望の方は、お名前、ご連絡先（住所・電話）、メールアドレス、大学との関係（卒業学部・卒業年月日など）を左記メールアドレスまで、お寄せください。

「阪大オリジナルグッズ」

大阪大学ワニ博士の頭脳グミ！

頭脳グミは、歯学研究科で、有志の阪大生の協力のもと「噛む効用」を調べる研究にも活用されました。ハードな食感!!　味は、コンセントレイトグレープ味とイノベーティブアップル味です！
製造はUHA味覚糖さんで、パッケージにはかわいいワニ博士があしらわれています。
集中したい時に、ただ噛みたい時に・・・。

阪大グッズは大阪大学生協で扱っています。www.osaka-univ.coop/shop/02_2.html

大阪大学未来基金「阪大腸活プロジェクト」を実施！

**昨年10月16日、
"人生100年時代を生き抜く健康リテラシーの向上"を
目的に、日本ケロッグ合同会社、江崎グリコ株式会社、
コニカミノルタ株式会社の協力による
産学共創のヘルスケアプロジェクト
「阪大腸活プロジェクト」の
キックオフ・セレモニーを実施しました。**

セレモニーでは、西尾章治郎総長が大阪大学を代表して挨拶を行い、「若い阪大生にとっては健康を身近なテーマとして考える機会は乏しい。今回、阪大生が主体となり、企業や本学の知見を活用し課題解決に挑む『阪大腸活プロジェクト』は、腸内環境への意識改革から行動改革を目標とする非常に意欲的なプロジェクトである。」と本プロジェクトへの期待を述べました。

また、「阪大腸活プロジェクト」では、10月16日から10月31日の約2週間、豊中キャンパス図書館下食堂において、学生の食生活に不足しがちな食物繊維などの栄養をサポートする「阪大無料腸食セット」が毎朝150食提供され、開始時間の午前8時には毎日長蛇の列ができ、毎日10分ほどで終了する人気ぶりでした。

さらに無料腸食セット提供トレイを利用した啓発ステッカーの展開やツイッター

を通じた情報発信など、阪大生の生活動線上において「腸活」への気づきを促す、様々な仕組みを提供しました。

「大阪大学同窓会連合会」のご案内

大阪大学同窓会連合会

大阪大学同窓会連合会会員証
下記の者は本会会員であることを証明する
氏　名：阪大太郎
大阪大学同窓会連合会
Osaka University Federation of Alumni Association
入会年：2007

各学部・研究科ごとに組織される同窓会をはじめ各種同窓会の発展に寄与するとともに、同窓会相互の交流、連携を推進することにより、卒業生等の交流、親睦を図り、併せて大阪大学との連絡を緊密にし、広く社会に貢献することを目的に平成17年7月25日に設立されました。

総合大学のメリットを最大限に活かした「オール阪大」としての人的ネットワークの構築を進め、大学と社会との連携を強化し、大阪大学の一層の発展と全同窓生の社会での活躍に資するために次の活動を行います。

❶部局同窓会相互の交流、連携の推進
❷新たな地域同窓会及び職域同窓会などの各種同窓会設立の支援
❸卒業生等と大阪大学との連携の促進
❹その他、本会の目的に沿った事業活動